

# 教育研究業績書

2018年05月14日

所属：心理・社会福祉学科

資格：教授

氏名：西井 克泰

研究分野	研究内容のキーワード
児童・青年臨床心理学	被虐待児のトラウマケア、発達障害児（特に、ASD）への心理療法、学校臨床
学位	最終学歴
博士（学術）、教育学修士、文学士	大阪教育大学大学院 教育学研究科 障害児教育学専攻 修士課程 修了 大阪市立大学生活科学研究科生活福祉学専攻臨床心理学分野 退学

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
<b>2 作成した教科書、教材</b>		
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
<b>4 その他</b>		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 資格、免許</b>		
1. (財)日本臨床心理士資格認定協会認定 臨床心理士	1988年3月	
<b>2 特許等</b>		
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
<b>4 その他</b>		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
1. 子どもの心と学校臨床 第15号 2016年8月	共	2016年08月20日	遠見書房	第15号の編者を担当するとともに、『新しいスクールカウンセラー：チーム学校をめぐって』という特集の『「チーム学校」とスクールカウンセラー』を分担執筆。文部科学省のいう「チームとしての学校」とは何か、文科省の答申（2015）に基づき概説を行い、「チーム学校」におけるスクールカウンセラーの役割について、最後にスクールカウンセラーの専門性について論述。
2. 子どもの心と学校臨床 第11号 2014年8月	共	2014年8月	遠見書房	特集「いじめへの対応と予防」の中の、「いじめの予防：未然防止という観点から」を担当。いじめ未然防止へ直接アプローチする方法ではなく、日ごろの人間関係をいかに円滑にしていこうかという視点からいじめ予防について触れ、人間関係の強化がかえっていじめを招きかねない逆説性についても触れている。
3. 子どもが先生が地域とともに元気になる人間関係学科の実践	共	2013年5月	図書文化社	大阪・松原七中校区の人間関係学科の6年間にわたる取り組みをまとめたもの。西井は、6年間の取り組みを支えた教師座談会、地域の人々での座談会の模様を編集。編著者として関わる。
4. 現場で役立つスクールカウンセリングの実際	共	2012年8月	創元社	第11章「高等学校のスクールカウンセリング」を担当。高等学校と小学校や中学校におけるスクールカウンセリングの違い、特色について概観した後、高等学校におけるスクールカウンセリングの課題について考察した。
5. 感じ・考え・行動する力を育てる人権教育—大阪・松原三中校区の実践	共	2011年9月	解放出版社	大阪・松原三中校区の「タウンワークス」「ホットワークス」「こころワークス」のうち、人間関係トレーニングを扱った「ホットワークス」の取り組みの中の「人間関係を通して個を育む」を担当。
6. 先生とスクールカウンセラーのための不登校生支援ハンドブック	共	2010年5月	学研エデュケーション	不登校生支援の基本的な入門書。不登校をめぐる事例とそれに対するコメントから各章がなっている。西井は虐待を受けた子どもの不登校支援のコメントを担当。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
7. 徹底図解 臨床心理学	共	2010年4月	新星出版社	臨床心理学の先駆者、理論、実践について図解で示されている入門書。クライアント中心療法、遊戯療法の項目を担当。
8. 親のメンタルヘルス—新たな子育て時代を生き抜く	共	2009年5月	ぎょうせい	「スクールカウンセリングからみた親支援」（頁106～116）を担当。スクールカウンセリングにおける親面接の概要について、相談内容、相談内容の特徴、親面接の進め方、包括的アプローチ、親支援の課題等について論述。
9. 児童心理	共	2008年1月	金子書房	「不登校の子どもの行動や言葉の意味を探る七つのポイント」（頁135～139）を担当。「子どもに好きなことをさせておけばいいのかわ」、「学校の話をすると子どもはイライラするのだから」、「人と接しない生活でいいのかわ」等々、親の質問に答えるというQ&A方式で論述。
10. 教育心理臨床パラダイム	共	2008年1月	至文堂 現代のエスプリ 別冊	「学校臨床心理士ワーキンググループによる教育研修の現状と課題」（頁144～149）を担当。学校臨床心理士ワーキンググループの役割、全国研修会の概要、全国研修会の評価、今後の課題等について論述。
11. 障害援助の臨床心理	共	2007年9月	健帛社	12章「性同一性障害の心理」（頁141～152）を担当。性同一性障害の概要、診断基準、性同一性障害をめぐる出来事、性同一性障害の多様性等について論述。
12. 思春期・青年期臨床心理学	共	2006年08月	朝倉書店	伊藤美奈子、伊藤一美、高石浩一、長峰伸治、藤岡孝志、西井克泰ほか6名 思春期・青年期の特徴、男女の発達の課題、求められる人間像についてまず論述する。そして、事例を4編提示し、思春期・青年期病理の諸問題について論述する。
13. 自己理解のための青年心理学	共	2004年04月	八千代出版	中里、松井、中村ほか ジェンダーの発達、青年期におけるジェンダーについて論述。
14. 子どものこころ百科	共	2003年02月	創元社	東山・梶谷・藤田・川原・ほか37名 5. 家族・家庭内の問題の前文として、家の持つイメージ、母性と父性、子どもの要求にうまく応える方法などについて論述。6. 学校や学習や友人関係に関する問題の前文として、学歴社会の様相の変化、それに伴う学習への取り組み方の変化、友人関係の変容などについて論述。10. 子どものトラウマを担当。トラウマ反応の特徴と対処の仕方などについて論述。（pp. 192～198, 254～260, 502～508）
15. 体験から学ぶ心理療法の本質	共	2002年02月	創元社	東山・梶谷・藤田・西井・川原・村上・中道・鍛冶谷・永島・楠本・杉野・八光・ほか13名 各執筆者は、大学院生時代に自らが指導教官から受けた指導についてふりかえり、その体験から心理療法の本質について述べている。本書は二部に分かれ、一部はクライアント体験から何を学んだか、6名の執筆者が自らの体験をベースとして論じている。第二部は、スーパービジョン体験からの学びが6名の執筆者によって述べられている。西井は編者であるとともに、エピソードを担当し、日常での修練について強調する。全（pp. 289）担当（pp. 280～285）
<b>2 学位論文</b>				
1. 同一性形成の日本の特質に関する研究—その実証的、臨床的、および理論的検討—	単	1992年3月	大阪市立大学 大学院 生活科学研究科 博士論文	エリクソン、E.H.の同一性に関しその現代的意義と課題を提示したうえで、日本の同一性に関する実証的研究、同一性形成過程における対人恐怖の検討、アパシーをめぐる同一性形成の問題、家庭内暴力をめぐる諸問題、家族同一性をめぐって、心理臨床における心身相関の検討、臨床場面における心身問題の諸相、日本の心身観の視点からの心理療法について、について考察した。
2. 青年の自立に関する要因について—自我同一性と日本の文化状況を手掛りとして—	単	1985年3月	大阪教育大学 大学院 教育学研究科 修士論文	大学生対象として質問紙調査を行い、青年の自立の要因を探ったところ、自我同一性得点の高いものほど（自立ができていく）、日本文化の特徴の指標としての「間人主義」得点の高い結果が出たことから、わが国の青年においてはわが国なりの自立を果たしていることが示唆された。
<b>3 学術論文</b>				
1. 発達障害への心理療法的アプローチの可能性—多因子遺伝とエピジェネティクスを手がかりに—	単	2018年02月	武庫川女子大学 学生相談センター紀要 頁1-5	発達障害、特に、自閉症スペクトラム障害（ASD）の増加の背景に、遺伝的要因よりも環境要因の方が大きいという点について、多因子遺伝という観点からまず論じている。多因子遺伝とは、一つ特定の遺伝子だけが発達障害に関与しているのではなく、多くの遺伝子の閾値を超えたときに発達障害となるという考え方である。次に、エピジェネティクスを手がかりに発達障害の環境因について論じている。エ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
2. ト라우マを起点として見た発達障害の諸相	単	2017年02月	武庫川女子大学学生相談センター紀要 第26号 11-21	ビジェネティクスとは、遺伝子そのものを変異させることなく、遺伝情報の発現をコントロールする機構である。これらが、環境因の影響を受けて、発達障害を発現させるし、環境次第で発達障害が寛解することも分かってきた。発達障害には可逆性があることから、心理療法の可能性を示すことができた。
3. 久保田紗帆氏の事例研究へのコメント—愛着とメンタライゼーションを手がかりに—	単	2016年03月31日	神戸親和女子大学心理・教育相談室 心理相談研究紀要 第14号	発達障害、特に、自閉症スペクトラム (ASD) はストレス脆弱性のために、ストレス関連障害はいうに及ばず、トラウマ関連障害を呈する。その上、ASDをはじめとした発達障害は、トラウマ脆弱性を背景にさまざまな精神症状を併発し、難治になりやすい。顕在化している精神症状の背後にあるトラウマに注目しておくと共に、トラウマ関連障害を呈していない場合も含め、発達障害にトラウマありきという観点を持つ方が、発達障害へのより丁寧なアプローチが実現できるのではないだろうか。この観点に基づき、トラウマを起点として見た発達障害の諸相について論じている。
4. 自閉症スペクトラム児への構造化プレイセラピー概説—武庫川女子大学総合心理相談室における取り組み—	単	2016年03月31日	武庫川女子大学発達臨床心理学研究所 第17号 9-18	久保田紗帆氏の事例研究へのコメントとして、事例の見立てを行い、自閉症スペクトラム障害 (ASD) であるクライアントに対して、基本的関係性の形成へ向けて、自閉的な世界へいかに応答するか、クライアントとの間にどのような世界を形成するか、象徴的解釈の危険性について触れ、治療的関係性の展開へ向けて、メンタライゼーションをめざしての構成された遊びの勧め、そして、さらなるメンタライゼーションへ向けての展開について論述。
5. 自閉症スペクトラム障害の愛着の組織化へ向けて—幼児期・学童期への支援をめぐる—	単	2016年01月	武庫川女子大学学生相談センター紀要 第25号 17-27	自閉症スペクトラム (ASD) をめぐる議論として、① ASDの定義、診断基準、②発達経路について述べ、ASDの愛着については①愛着の定義、②定型発達の愛着、③ASDの愛着について述べた後、ASDの愛着の特性に注目した支援、特に、愛着の組織化へ向けての支援について論述。
6. ジェンドリン哲学の基本概念—「哲学入門」を手がかりとして—	単	2015年1月31日	武庫川女子大学 学生相談センター紀要 第24号 15-28	ユージン・ジェンドリンのフォーカシング指向心理療法の哲学的基盤について、彼の著作である「哲学入門」(英文)を抄訳しながら、体験の意味、フェルトセンス、体験的哲学、体験過程とは何かについて解説、ならびに論考した。
7. 本学学生の精神的健康について—新入生に実施したGHQの経年比較を通して—	単	2014年1月	武庫川女子大学学生相談センター紀要 第23号	精神的健康調査を新入生へ毎年実施している結果を5年間の経年比較を行った。全体としては年度による差はなく、学部と短大との差が有意であった。
8. 高等教育における障害学生支援の現状と展望—学びのユニバーサルデザインを目指して—	単	2013年3月	武庫川女子大学教育研究所 研究レポート 第43号	発達障害学生を含むあらゆる障害学生の全国調査結果をもとに、その実数や支援の現状を明らかにしたうえで、学びのユニバーサルデザインを実現するためにはどのようなことが課題となるかについて考察した。
9. 教師向け研修プログラムに関する理論的検討—コミュニケーションにおける情報処理に着目して—	単	2013年3月	武庫川女子大学 臨床教育研究 第19号 63—77	認知ということを中心に、対人的コミュニケーション (人の内部での情報処理の仕方) への気づきをいかにもたらすかについて、教師向け研修で具体的にどのように進めていくかを理論的に検討した。
10. 発達障害学生への支援の現状と課題—全国調査報告書を手がかりとして—	単	2013年1月	武庫川女子大学学生相談センター紀要第22号	学生支援機構が毎年発行している障害学生支援に関する全国調査、過去5年間をまとめたもの。障害学生の中でも発達障害学生に着目し、その実数、支援の現状、支援の課題について考察。
11. 心理臨床の近接領域—ファーマシューティカル・ケア	単	2011年12月	武庫川女子大学学生相談センター紀要第21号	心理臨床の近接領域の一つにファーマシューティカル・ケアのあることに注目し、ファーマシューティカル・ケアとは何か、その理論と実際に触れながら、心理臨床の実践との比較を行う。
12. ピエール・ジャネのトラウマ論に関する基礎概念—外傷性記憶と解離をめぐる—	単	2010年11月	武庫川女子大学学生相談センター紀要第20号	ピエール・ジャネの解離理論が約100年たった現在見直されており、その理論の基礎概念とその現代的貢献について考察。
13. ト라우マ概念の原因論をめぐる変遷—フロイト以前の研究と実践から—	単	2010年02月	武庫川女子大学 学生相談センター紀要 第19号 15—27	鉄道脊椎症、外傷神経症、シャルコーの心的外傷説、20世紀初頭の惨事トラウマ研究、惨事・ヒステリー・性的虐待等、トラウマの外傷説から心的外傷説へと至る原因論の変遷について考察。
14. 「主訴分類」から見た本学学生相談の特徴—2003年度から2007年度までの集計結果を手がかりとして—	単	2009年2月	武庫川女子大学 学生相談センター紀要 第18号 17—26	「活動報告」における主訴 (相談内容) 分類の変遷、主訴の経年的変化に見られる特徴、学科別に見た主訴の特徴、面接回数カテゴリーから見た主訴の特

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
—				微、主訴分類と活動内容との関連について等について考察。
15. 統合的心理療法概説—わが国の土壌を反映した心理療法の探求—	単	2008年2月	武庫川女子大学 学生相談センター紀要 第17号 29—41	心理臨床における統合化の動き、統合的心理療法の視点、統合的心理療法を支える土壌等について考察。
16. 現代青年とイニシエーション（Ⅱ）—青年期心理療法を手がかりとして—	単	2007年03月	武庫川女子大学学生相談センター 第16号	青年期におけるつまづきを、イニシエーションのプロセスとして捉え、そのプロセスが個人の内面においてどのように展開されるのか、心理療法の過程が4事例述べられていく。また、そこにおける心理療法家の役割や、親面接の重要性について述べられていく。
17. 現代青年とイニシエーション（Ⅰ）—現代的諸相とひきこもりをめぐって—	単	2006年2月	武庫川女子大学 学生相談センター紀要 第15号 15—25	社会変動と青年心理、能力とは何か、青年期の平穩化、自立とつまづき、ひきこもりの背景とその本質、現代的イニシエーションの諸相等について考察。
18. 心理療法における「クライアント中心」の本質と今日的課題—「対称性の原理Principle of Symmetry」を手がかりとして—	単	2005年3月	武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編 第52巻 頁93—104	クライアント中心をめぐる諸相、クライアント中心の本質、今日的課題等について、中沢新一の「対称性の原理」をベースとして考察。
19. 「生徒・進路指導」における体験学習の展開	単	2005年03月	教育研究所『研究レポート』	教職課程科目へ「心の教育」を取り入れた授業の実際について論述。
20. スクールカウンセラーの仕事—不登校の子どもを持つ親への講演と一問一答の実際—	単	2004年3月	武庫川女子大学 臨床教育学研究 第10号 1—20	不登校の現状、不登校への対応（居場所の確保、経験をつむことの大切さ、自己効力感の形成、サポーターの存在、ソーシャルインクルージョンの視点から）、親との質疑応答、講演会における諸注意（話は具体的であること、親にシフトすること、本質を伝えること）等について論述。
21. 学校臨床心理士（スクールカウンセラー）の倫理と責任性—守秘義務をめぐって—	単	2004年3月	武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編 第51号 頁81—90	学校の現状と臨床心理の導入、秘密の意義、倫理をめぐる諸問題等について考察。
22. 生徒指導の新しい流れとスクールカウンセラーの役割	単	2004年09月	武庫川女子大学 臨床教育学研究 第11号 65—78	昨今の生徒指導で主流になりつつある予防教育的アプローチに関し、スクールカウンセラーの役割について、ガイダンス機能の「強化」と「深化」をめぐり論述。
23. 「学級崩壊」の意味するもの—「母性社会」を手がかりとして—	単	2001年03月	英知大学キリスト教文化研究所紀要 16巻 1号	学級崩壊を取り上げるに先立ち、学校教育における基本的問題について、「母性社会」を手がかりに、「母性の混乱」という視点から論じている。その後、学級崩壊についてその定義、その基本的問題（特に、権威ということ）について論じ、今後の展望について述べられていく。担当（pp. 169～185）
24. 非行の心理療法—学校教育相談における現状と展望—	単	2001年03月	英知大学人文科学研究室紀要『人間文化』 4巻	思春期の子どもたちが引き起こす非行について、その行動化の背後にある特徴を取り上げつつ、非行の心理的特性について述べ、カウンセリング適用の難しさ、ならびに適用の可能性について論じられている。その上で事例を3篇提示し、「関係」を持たない「関係」のとり方について、対決について、そして教師カウンセラーのジレンマについて取り上げている。担当（pp. 65～93）
25. 心理臨床事例から見た「ひきこもり」への理解と対応に関する一考察	単	2001年02月	英知大学論叢『サビエントシア』 35号	ひきこもりについて臨床心理学的な立場から、その定義、特徴（特に、情緒的交流の回避）、そして問題点（特に、男性原理の欠如）について述べている。ひきこもりの心理については、その背景、現代青年期心性との関連、そして思春期病理との関連から論じている。ひきこもりの事例からは、3篇提示し、各々に考察するとともに、総合的な観点から「創造的退行」を中心に考察を試みている。担当（pp. 145～167）
26. クライアント中心療法におけるアクティブ・リスニングの葛藤保持力寄与への一考察	単	2000年03月	英知大学人文科学研究室紀要『人間文化』 3巻	アクティブ・リスニングがクライアントの葛藤を保持するプロセスに寄与することに注目し、事例を考察しながら、葛藤を保持するとはどういうことなのか、そのためにカウンセラーはどのような関わりが望ましいのかなどについて論じられている。担当（pp. 97～124）
27. 学校教育相談の現状と課題—事例の「見立て」を中心として—	単	2000年02月	英知大学論叢『サビエントシア』 34号	学校教育相談の現状について、まず教育相談とは何か、教育相談の学校現場での位置づけ、生徒指導との兼ね合い、教育相談の意義ならびに教育相談への関心の高まりについて述べられる。その後、事例の「見立て」の重要性について、例を示しつつ述べられていく。最後に、教育相談において「見立て」を行っていく上での課題が提示されている。担当（pp. 369～389）
28. 「いじめ」の解決へ向けての序論—心理臨床の視点からの一考察—	単	1999年03月	英知大学キリスト教文化研究所紀要 14巻 1号	いじめを二つのタイプに類型化を試みた後、いじめに背景にある仲間意識の変遷について取り上げ、攻撃性と消極性の表裏一体の関係にも触れつつ、最後に、いじめの発生と共感性の高まりという両者の逆説的關係について述べられている。担当（pp. 135～150）

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
29. 消極的な子どもの理解と対応－生活指導に生かすカウンセリングマインド－	単	1999年03月	英知大学人文科学研究室紀要『人間文化』 2巻	消極的な子どもとは、どのような性格傾向を持っているのか、その特徴についていくつか述べた後、そのタイプを「不安」をキーワードとして二つに大別し、それぞれのタイプに対して教師が学校場面でどのように対応していけばよいか述べている。担当 (pp. 65～89)
<b>その他</b>				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
6. 研究費の取得状況				
<b>学会及び社会における活動等</b>				
年月日	事項			
	日本心理臨床学会			